

---

# 少年ルークの、一年以上の旅

村岡 暗太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少年ルークの、一年以上の旅

### 【Nコード】

N7111X

### 【作者名】

村岡 暗太郎

### 【あらすじ】

初めての投稿です。

そうとう、厨二病です。

## 登場人物紹介（1stシーズン）

ルーク・クラウド：元気いっぱいな熱血少年。この物語の主人公。

リユウガ・カナト：常に冷静で、ルークとは、逆な性格。顔、頭脳、体力、など様々な分野でトップの男、中3の頃、学校のトップをやり、白き、ライオンの、異名を持つ。

イツナ・パランシール：この物語の、ヒロイン的美少女。

ラムタ・ヘレツ：存在感の薄い少年。常にiPodで、B・Zの曲を聴いている。

メビウス・マデラ：ルーク達が暮らす街の王子、経歴等一切不明。

「仮面騎士五兄弟」

赤仮面ショウ：火、火！とにかく、火を好む男。

氷仮面ガイ：氷、氷！とにかく、氷な男。

雷仮面バズ：雷、雷！とにかく、雷な男。

鉄仮面ユウキ：鉄、鉄！とにかく、鉄な男。

白仮面ハル：白、白？なぜが、白な男。

## 第一話：少年の旅立ち

ここは、地球上に存在するはずのない小さな村、フリーダム。人口わずか64人。近くに学校や会社は無く、フリーダムに住む者は子供も、大人も、自由気ままに生活していた。なに不自由なく、平和なフリーダム。そんなこの村には、1つだけ、祭りがあった。

それは、毎年7月7日に男女が必ずカップルを作らなければならぬ日があった。それがいやで、この村を出る者も数人いた。そんなある日、村を出た者が何者かに、誘拐、殺されると言う事件がおきた。

そして現在はその事件から、

三日後の、7月11日。

その日、フリーダムの王子、メビウスが言った。

「このままでは、もうこの村には人が来なくなる。そしたら、レディー達の数も減ってしまう……」

実はフリーダムの王子、メビウスは、だいの女好きである。

そして王子はこう言った。

「よし、ルークを呼べ。」

王子の命令により、部下達が、ルークを呼びに行った。

それから、数分後、ルークは王子のところに来た。

「お、お呼びでしょうか。」

王子は深呼吸をしてみた。

「近頃、この村を出るものが何者かに殺されている事は知っているな?」

「はい……」

「そこでだ！ルークお前がこの村の平和を守るのだ！」

「はい？」

ルークは首を傾げる。

「このバッグに、トランプと、折りたたみ傘と、スマホと、短剣と、ハンドガンが入ってる。さあ、行くのだ勇者よ！フリーンダムの平和を守る為に！」

王子はそう言いながら、ルークにリュックを渡した。

バッグを受け取ったルークは、

「いや、まだ……」

「ブツブツ言わんでさっさと行け！」

王子は、そう怒鳴り、近くに飾ってある、レイピアをルークに向けた。

ルークは急いで、村を出た。というより、村を出ていかされた。

ルークはため息をつきながら

「はあ、これからどうすればいいんだよ。」

ルークは、そう言いながら、歩きはじめた。

しばらくすると、大きな木があった。そこには、二人の男と、一人の女がいた。

## 第二話 初めての戦い

ルークの前に見えた、大きな木。そして、その下にいる、二人の男と一人の女。ルークは村の平和を、守る。と言っても一人ではなにもできない。そう思い、彼らの仲間になる為に声をかけた。

「あの〜、すみませんけど……」

「ああ？なんだテメエ？」

ルークが喋り終わる前に、リーダーらしき男がいった。

「俺たちになんか用か、ええ？」

男は、ルークをにらみながら、言った。

すると、もう一人の気の弱そうな少年が呟いた。

「リーダー、そんな言い方ないんじゃない？」

「テメエは黙つとけ！！」

男は、気の弱そうな少年に怒鳴った。

そして、男はルークに言った。

「テメエ、俺たちになんの用かしらねえが、文句あんなら消えてもらうぜ。」

そういいながら、男は肩に掛けてある大剣を構えた。

ルークは急いでバックの中から、ハンドガンを出した。

「END……」

男はそう言うで大剣をルークに向かって切りだした。

ルークは素早くその攻撃をかわし、ハンドガンを連射した。すると、同じ木に座っていた女が男の前にたち、杖を振り

「月光の舞い」

（なんとも厨二病なww）

すると、花吹雪が起こり、弾をはじき返した。

すると今度はその女の後ろの男の後ろのにいたガキがギターを構え、先から、雷をだした。

(ワロタww)

ルークはなんとかよけたもの、彼らが少し怖くなりその場を離れた。

### 第三話 新たな隠し武器

ルークは男達から必至に逃げた。

ちよくちよく後方をみて、彼等が来ていないかを確認した。追ってこない事が分かりルークは、近くの石に座った。

「どうすりゃいいんだろ？」

「簡単ですよ。」

後ろにいる男が答えた。

「彼等を倒せばいいんです。」

「あ、あなたは」

ルークは名を尋ねたが、男は「名乗るほどのものではありません。

たまたま近くをとうりかかった時にあなたの姿が見えたものですから。それでは。」

男はそう言つて、ルークのもとを離れた。

ルークはしばらく考えた後、バッグからスマホを取り出した。ルークはそのスマホが何かわかった。

Apple社が先月発売した、iPhone 4Sだ。ルークは、ロックを解除し、内臓アプリを確認した。その中に「刀ブレイカー」と、言うアプリがあった。ルークは、アクションゲームの一種かとおもいそのアプリを起動させた。

すると驚く事に、iPhone 4Sの先から、銀に輝く鋭い刃がでて来た。

「こ、これは……」

このアプリは、アプリを起動させる事により、近接武器へと変化する。と言う超優れものだ。

ルークはこの説明を見た時、「これを使えば、あの男達にも勝てるかもしれない。」ルークは、一旦アプリを切り、ポケットにいれ立ち上がった。

彼は、iPhone 4Sを右手で握りしめ、さっきまで男達がいた木の方へむかった。

さっきの木の下には誰もいなかった。

彼は、腕時計を見た。

男達との戦闘から、逃げて1時間27分。彼は溜め息をついた。

その直後、大きな爆発音が響いた。

爆発音のした方向は、7:00の方向。ルークはその方向をむいた。

そのポケットには、森があり、奥の方から煙が上がっていた。

ルークは急いで森の奥の方へとむかった。

## 第四話 決戦！鉄仮面

爆発音のした方へとむかったルーク。

そこには、イノシシや、クマの死骸が転がっていた。

ルークは恐る恐るも、炎が燃えている方へとむかった。

すると、そこには、大きな男がたっていた。

その男は、全身を鉄でおおい、大きなハンマーを担いでいた。足首には、20kgと書かれた重りをつけていた。

ルークはその男に言った。

「貴様か！この爆発を起こしたのは！？」

「ああそつだ。これは俺がやった。悪いか？」

「当たり前だ！こんな事をしてなんになる！？」

すると、男はルークの方を向いていった。

「世界征服それが俺たちの目的。その為にも、貴様にはここで死んでもらうぜ！！」

男はものすごいスピードでハンマーを振り回し、ルークに攻撃をした。

ルークは、iPhone 4Sの刀ブレイカーを使い、男に対抗した。しかし、相手のスピードが速すぎて、ルークは自分の身を守るのに精一杯だ。

「どうした、どうした！そんなんで、俺たちを倒そうって言うのかよ！？笑わせんじゃねえ！」

男はそう言っつて、空高くジャンルした。そしてハンマーを大きく降りおろした。

そのスピードはまるで、槍のようだった。

そう、男は、20kgもの重りをつけているのに、ハンマーが槍に見えるほどのスピード攻撃をしてくるのだ。

ルークは刀ブレイカーではガード出来ないと思ったのだろう、ルークは、素早くその攻撃をよけた。

そして、素早く木の後ろに隠れた。

男は、周りを探っている。

「おい小僧、早くでてこい。この鉄仮面に対して逃げてても無駄だ。

どうせ貴様は、俺の手によって、灰の如く散るんだ。さあ出てこい！」

ルークは、刀ブレイカーを見た。攻撃力110守備力85決して強い武器とは言えない。だが、よく見れば、右したに、「トランザム」と書かれたボタンがあった。

ルークは説明などみる暇が無かった。ルークはそのトランザムボタンをおした。すると、

鋼色をした刃が赤く発行しだした。と、同時に、攻撃力150守備力100へとアップしたのだ。ルークはチャンスだと思い、鉄仮面の前に姿を現し、iPhone4Sを構え、鉄仮面に斬りかかった。「散るのはお前のほうだ！くらえ！」

鉄仮面は、声のしたほうを向いた。だがそれはもう遅く、鉄仮面は、ルークの攻撃を食らった。ルークはそれから、軽やかな動きで、鉄仮面の動きを交わし、鉄仮面に攻撃をくらしていった。

ルークと鉄仮面の戦闘から約27分。

ルークの攻撃により、鉄仮面の、頭部の仮面にヒビがはいった。

鉄仮面はそのヒビを押さえいった。

「我々仮面族はこの仮面がなければ、存在価値が無い。その為、今回は貴様の勝ちとしておく。しかし！来週末にでも、我々は貴様を倒す。それまで人生を楽しむがいい！」

鉄仮面はそう言ってこの場をさった。

こうして、ルークは鉄仮面に勝利したのだった。

## 第五話 不思議な村

鉄仮面を倒したルークは、森を抜けた。そこには、ボロボロの家が7・8件ほど、建っており店が二件ほどあった。森を抜けたところに看板が建っていた。

「ペラキト村」

看板にはそう描いてあった。

ルークは、ペラキト村に行きその村で、一番大きな家に向かった。

ルークは、その家のドアをノックした。が、中から声はしない。

ドアをよくみると

「ご自由にお入りください。」

ルークは恐る恐るドアを開けた。家の中は真つ暗だった。

ルークは、ドアを開けてすぐ右手にある電気をつけた。

すると、・・・

家の中に大勢の人が血まみれで倒れていた。体が冷たくなっていた。さらに、ロッカーや、棚をあさった後もあった。

ルークは人の自体を踏まないように、ゆっくり、奥へ向かった。

そこにはドアがあり、外の光が漏れていた。ルークは、そーっとドアを開けた。そこには、様々な機械がおいてあった。さらに、戦車や、ヘリコプターなどが格納されていた。さらに、奥へ行くと、約18mのロボットがあった。

そのロボットは、分厚い防弾ガラスに囲まれていた。ガラスには、「触るな！危険！」と書かれた紙が貼ってあり、ガラスに、

「RX78-2ガンダム」と刻まれていた。どうやら、このロボットの正式名称らしい。隣には、このロボットようの、ライフルや、ミサイル、シールドなどが置かれていた。

## MSガンダム

謎のロボット「ガンダム」の存在を知ったルークは、ガンダムについてもつと情報を集める為、周囲を見渡した。すると、赤い字でVと書かれた青いノートを見つけた。ルークは近くにあったイスに座り、机のスタンドライトを付けノートを広げた。そのノートには、ガンダムの操縦方法や、特長などが書かれていた。ルークは、そのノートをひたすら読み続けた。すると、先程たくさんの自体があった部屋から誰かの足音がした。

ルークはとっさに机の下に隠れた。

しばらくするとドアが開き1人の男が出て来た。その男はメガネをかけており、40代くらいの小パーマの男性だった。

その男は、部屋を見渡しこう言った。

「この部屋にいるのわかっておる。早く出ておいで。」

その男は、怒っていないかった。どうやら、スタンドライトがつけっぱなしだったから、部屋に人がいると思ったのだろう。

ルークは机の下から出た。

男はルークの顔をしばらく見つめた。

「旅の者かな」

男は微笑みながら聞いた。

ルークは小さく頷いた。

「やはりな。息子と同じか。」

私の名は、黒田 淳平 このガンダムを作った男だよ。」

黒田という男は頭をかきながらいった。

「本当は、悪の組織と戦う為に作ったのだが、私ももう年だし、ここにくる男は皆、世界征服の為だから、困ってたんだよ。」

ルークと黒田はこんな話を続けていると、いきなりドアが開き、1人の男がこう言った。

「じいちゃん！例の奴は！？」  
その男はルークが初めて出会った三人組のチームの一人、ラムタで  
あった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7111x/>

---

少年ルークの、一年以上の旅

2011年12月14日18時53分発行